

【研究ノート】

伊勢物語八橋図をめぐる

昨年の秋号で、伊勢物語の絵入り版本の特徴やその変遷について述べましたが、今回は伊勢物語の第九段八橋の場面を絵画化した作品を取りあげ、特に橋の描き方に注目してみたいと思います。

都に住みづらくなった主人公が東の方へ旅に出た際に立ち寄った所の一つが三河の国八橋でした。そこは川に橋が八つ架かっているため八橋と呼ばれ、沢にはカキツバタが美しく咲いていました。そこで主人公がカキツバタの五文字を織り込んだ歌を詠み、伴の者たちは歌に感動し涙をこぼすというのが「八橋」の話の大筋です。

この八橋の場面を絵画化した作品として最も古いものは「伊勢物語下絵梵字経」(図1)で、何本にも分かれた水流の上に、橋板が数枚ずつ途切れ途切れに渡されています。それに対し、室町から桃山時代に描かれた伊勢物語絵の中の八橋は、ジグザグと一続きにつながった形のものが多くなり、その形は伊勢物語の最初の絵入り版本である嵯峨本(図2)に受け継がれます。前回も述べましたが、江戸時代の伊勢物語絵においては、この嵯峨本の挿絵の影響が極めて強く、当館蔵の「伊勢物語図屏風」(図3)のように、カキツバタの咲く水流の中、雷光型に長く伸びた橋が八橋のイメージとして強く残されることとなります。

一方で、伊勢物語本文の八橋の

説明を見ると、「そこをやつはしといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、はしをやつわたせるによりてなん、やつ橋といひける」と述べられており、八橋とは、水流が蜘蛛の手のように数多く分かれながら流れているところに橋を八つ(※八という具体的な数ではなく、数多くという解釈もある)架けられている状態を示すことが分かります。つまり文章本来の記述ですと、「伊勢物語下絵梵字経」の表現に近く、嵯峨本や他の多くの作例のように、橋がジグザグと連なっている状態ではないようです。では、どうしてジグザクと連なる橋が広く受け入れられたのでしょうか。一つ考えられるのが、和歌における八橋の使われ方です。後撰集「うち渡しながき心は八橋のくもでに思ふことは絶えせじ」、古今和歌六帖「恋せんとなれる三河のやつはしはのくもでに思ふことはたえせじ」など、川の様を表していた「くもで」が八橋にかかり、その「くもで」は「蜘蛛の手」という意味と「ひたすらに思う」という意味がかけられています。そのため、くねくねと蛇行する川の「くもで」というイメージが橋にも重なり、またひたすらに絶えず思うという意味が、折れ曲がりながら長く続く八橋のイメージを作り出し、見た目のインパクトや嵯峨本の影響の大きさもあり、そのイメージが定着していったのではないのでしょうか。

ところが、江戸時代後半になると一

部の八橋図に新たな傾向が見られます。そのきっかけは、国学者などが記した伊勢物語の注釈書にあるように思われます。江戸後期の伊勢物語の注釈書には、八橋の形状について考証し、具体的に述べるものがあるのです。寛政5年(1793)の賀茂真淵著『伊勢物語古意』、天保10年(1839)の斎藤彦麿著『勢語図説抄』(図4)といった注釈書では、絵画に描かれる八橋の形を批判し、文章に即した橋の形を図で再現しています。提示された橋の形は少しずつ異なるものの、どれも枝分かれした水流に橋が一つずつ架けられる形をとっています。そしてこのような図様は、注釈書だけでなく八橋を題材とした絵画作品にも見られるようになります。文政8年(1825)出版の絵入り版本『伊勢物語図会』の八橋の場面を見ると、何本にも分かれた川に橋が一本ずつ架けられています。『伊勢物語図会』は、本居宣長の弟子であった市岡猛彦が本文を校訂し、頭註を附し、画家に挿絵を依頼したものであり、国学者が深く関わっている点が注目されます。もう一つ同じような作例として、当館所蔵の岡田為恭筆「八橋図」が挙げられます。この為恭作品は、画面にカキツバタをあまり描かず、描表装にカキツバタを一面に散らすという凝った構成が目を引くのですが、背景に

小さく描かれる八橋は、川の流れごとに一本ずつ架けられているのが確認できます(図5)。岡田為恭の画業については昨年の特別展「復古大和絵師為恭一 幕末王朝恋慕一展」の図録に詳しいですが、深く王朝の文化を愛し、絵画において考証を非常に大切にされた画家であることが知られています。このように、国学や考証学の影響を強く受けた作者によって作られた「八橋図」は、伊勢物語本文の記述により近い形を目指し、新しい八橋の姿を描くようになっていくのです。こうした八橋の形は、江戸後期における古典文学の学術的研究の成果を表しており、物語の絵画化が注釈や国文学の問題などとも密接に関わっていることが窺えます。とはいえ、江戸後期以降においても、八橋と言えば雷光型に連なるイメージの方が断然強く、絵画作品や絵入り版本で引き続き多く描かれるとともに、この長く連なる形の八橋が実際にカキツバタの咲く沼に架けられたり、歌舞伎の舞台演出として用いられたりしており、一度定着した絵画イメージの影響力の大きさを考える上でも注目されます。(学芸部部員 宮崎もも) (図1、2は伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店1984年より、図4は『伊勢物語古註釈大成』日本図書センター 1979年より複写。)

図1 伊勢物語下絵梵字経
(鎌倉時代・逸翁美術館蔵) 下絵書起



図2 嵯峨本伊勢物語
(江戸時代初期・鉄心斎文庫蔵)



図4 斎藤彦麿『勢語図説抄』
「八橋の図」(江戸時代後期)

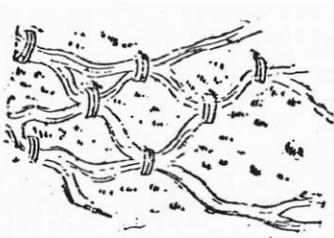


図5 岡田為恭筆 伊勢物語八橋図
(江戸時代後期・大和文華館蔵) 部分

